



ル 4  
6318  
1



越後鈴木牧之撰  
江戸京水百鶴画

京山人百樹刪定

# 北越雪譜

初編  
三卷

江戸書肆

文溪堂梓行

北越雪譜敘



世之農商而嗜文雅者或不知取以文雅為文雅徒企羨韻士墨客之風標沈酣文酒流連玉月而置生計於不問以傾產業者間亦有之是豈嗜文雅罪哉其人特自取之耳矣鈴木牧之翁者北越塩澤之老農也性嗜文雅而能尚節儉抑賭博不強誦讀於經營之中而務鉛槧於會計之餘以交遠近之墨客嘗以堪忍之二字

北越雪譜

銘自字以故其名久布遠邑石生業亦因以致  
 豐饒矣嗚呼若翁者不徇文雅之名而能務其  
 實者非耶余於翁得一面識於江戶而後持以  
 書訂交者有年于此今茲乙未遠寄示其所著  
 北越雪譜者六卷併囑以校訂時方盛夏炎威  
 如燬乃就小窗下試繙尋閱之則越雪恍如耳  
 聞騷屑之聲目見紛霏之影使人頓忘瓢中之  
 苦讀到積疊埋屋行旅不通人以窮乏柴米或

不給則澶然寒顫肌膚为之粟生矣余因以謂  
 紈袴輕薄子弟當微雪俄下紛之舞空之際彫  
 鞍寶勒飛玉羣於郊坰或纏帽棕鞋踏履踏於  
 街衢或重舸載妓或高樓呼酒直以爲勝遊樂  
 事曾不知飢寒由何物若余其人讀此書依以  
 想其種之凍餒之苦狀孑然則安在不有能者  
 怪非宴安之公共而戚之為生戒懼之心者哉  
 寧梓之行之不有裨益世教蓋非鮮小也聞者

稍得秋涼聊削之取難校訂方畢者三卷書賈  
文溪堂見而喜之謀梓以之余寄簡以告翁  
曰雪中尚戶漫筆豈敢效梓耶於是予不復俟請  
之於翁奉以付之翁之嗜文雅而能發其實以  
必笑領之而已翁之稿本國字之間僅字者嘗  
不添音訓之假名余今盡添之以便童蒙云爾  
天保六年乙未秋閏菊開日

江戸 京山人百樹并書



此書の稿本國字別冊と或は其説に大國字描と添ふものと  
皆枚之翁が自筆の草画也此筆梓行の爲にせし猶六國に  
汚穢重複あり今梓に臨てその國の過半以省き且或新に  
考れを存て卷中夾刺考に單冊に終る難哉也其刻は  
是刪定の考に傷る所也余嘗て原圖以覽き雪中の猶狀  
混錯を走墨して終て通曉し難きこれ靴中の瘡痒を如何如  
く唯翁が草圖に倣ひて寫し描き而已或原圖の梓に入るも則  
ち畫致加ふ或説有り國字きりの其説に據て其國字作じもあり蓋余未だ  
越地或蹈て越雪の真景を於て茫然たり故に雪圖に於て違漏あり  
知るべき其語を編者に駁すを勿き乙未秋 京水百鶴



掘除積雪之圖



枕間簾、  
雪華飛天  
曙空未白  
四圍烟絕  
樵林人  
不見風  
寒獵徑  
犬空  
飢懶乘  
冷斃促  
高履屐  
拂多光  
集敵衣  
屋裡要  
知春  
色到  
牆頭之  
月早  
梅緋  
右賦  
小越  
雪景

江戸 解石山人 祿題

京水筆

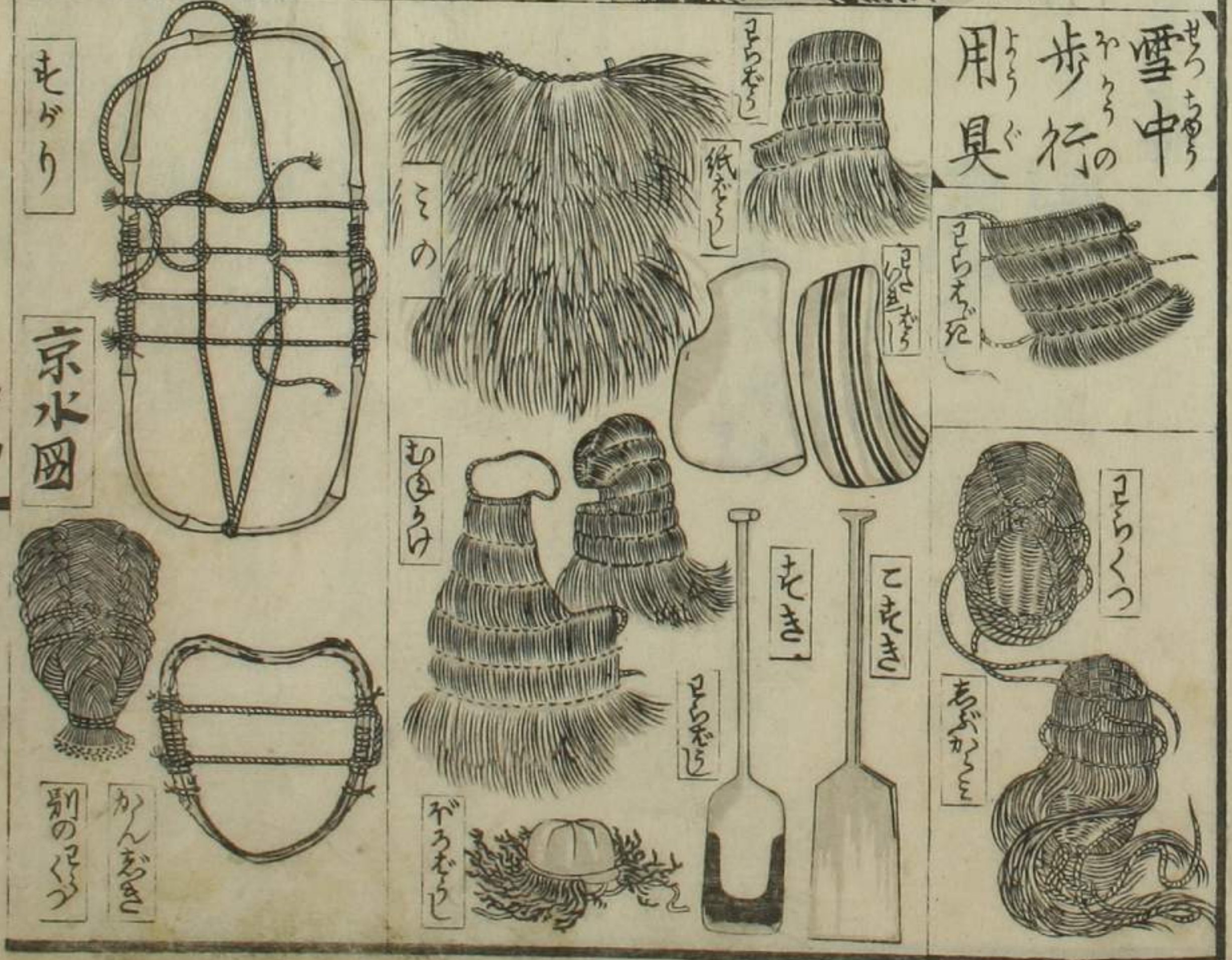


屋上雪掘圖



縫を穿く雪行圖

雪中歩行の用具



毛がり

京水圖

別のくつ  
かんまき



あり天小近を熱際との中を冷際との地小近を温際との地気ハ冷際を限りと  
 して熱際不至らず冷温の二段ハ地を去るる甚く遠く富士山ハ温際を越て冷際  
 小ちるる也急絶頂ハ温気通せざる由多草木を生ぜず夏も寒く雷鳴暴雨を温  
 際の下小るる雷と夕立ハをえさの雲ハ地中の温気より生ざる物も多小其起る形ハ  
 湯気のごとく水沸て湯気の起と同様の雲温るる気成以て天小升りかの冷  
 際小く温るる温るる気消て雨と湯気の冷て露と如く冷際小く温るる雲散  
 さて雨露の粒珠ハ天地の氣中ハ在る成以て草木の實の山成りしるハるるも氣中ハ  
 生ざる由多雲冷際小く温るる雨とるる時天寒甚く紀時ハ兩氷の粒とあ  
 りて降り下る天寒の強と弱とよより粒珠の大小成爲す是を霰と雲とを  
 霰ハ夏ありをの弁地の寒強き時ハ地氣形成るるびく天小升る微温湯気のごとく  
 天の曇ハ是地氣上騰と多けき天灰色をさく雪とるる曇ハ曇るる雲冷  
 際小到り先雨とる此時冷際の寒氣雨成氷す此力たるる由多花粉を爲して

下ハ是雪と地寒のよきとつよきとふより氷の厚と薄と如く天小温冷熱の三  
 際あり人の肌ハ温小肉ハ冷ハ臟腑ハ熱とる同道理ハ氣中萬物の生るる悉く天  
 地の氣格ハ随ふ由多是余ガ發明ハわす諸書ハ散見しる古人の説之

○雪の形

凡物を視る小眼力の限りありて其外を視るるす言ハ人の肉眼を以て雪成るる  
 一片の鷲毛のごとくも数十百片の雪花成併合して一片の鷲毛を爲し是を驗微  
 鏡小照し視るる天造の細工なる雪の形状奇と妙とるる下小図を如く其形の  
 齊々たるハかの冷際小於て雪とるる時冷際の氣運ハ一かゝる由多雪の形氣ハ應  
 じて同くもなる由多も肉眼のむらざる至微物也昨日の雪も今日の雪も一望  
 の白糝糊を爲のて下の図ハ天保三年  
 五十五品の内ハ騰寫中を雪六出成爲 御説小曰凡物方體ハ四角なる必ハを  
 以て一範圍と山體ハ丸を六成以て一範圍ハ定理中の定数証へくす云と雪を六

の花とのふり 御説を以て 愚小曰ハ天の正象方ハ地の実位之天地の  
 氣中ハ活動する方物悉く方山の形失つてその一以て之ハ人の體方ふて方  
 山を曰く之曰く是天地方山の間ハ生育由多小天地の象然するを以て子  
 の親ハ似るハ相同ト雪の六出する所以ハ物の眞長數ハ陰半數ハ陽ハ人の體男ハ  
 陽半也九出  
 頭・兩耳・鼻・兩手 女ハ十出也 兩乳あり 九ハ半の陽ハ長の陰ハ  
 且とも陰陽和合して人成る也男ハ無用の兩乳ありて女の陰ハ故り女ハ不用の  
 陰舌ありて男ハ故り氣中ハ活動萬物此理ハ漏るる事ハ雪ハ活物ハ故り  
 寔なる所ハ活動の氣あり也六出ハ形の陰中或陽ハ象ハ山形を具ハ  
 もあり水ハ極陰の物也一滴も一時はるるハ山形を落とさるところハ活  
 萌あるも急ハ陰ハ陽の山をうへるるハ天地氣中の機関定理定格の  
 奇ニ妙ニ愚筆ハ及ハ

○雪の深淺

左傳ハ隱公ハ平地尺ハ盈を大雪と為と見え其國暖地とバ之唐の韓愈ハ雪  
 を豊年の嘉瑞といひも暖國の論ハ唐土ハ寒國ハ八月雪降るハ五雜  
 組ハ之を暖國の雪一尺以下ハ山川村里立地ハ銀世界をハ雪の飄々  
 たるを觀て花ハ論ハ玉比ハ勝望美景を愛ハ酒食音律の樂を添ハ画ハ寫ハ  
 詞ハ稱て稱觀ハ和漢古今の通例也是雪の淺き國の樂ハ我越後  
 のごとく年毎ハ幾文の雪を視ハ何の樂きもハ雪の爲ハ力を尽ハ財を  
 費ハ千辛万苦する下ハ説く所を視てハハ

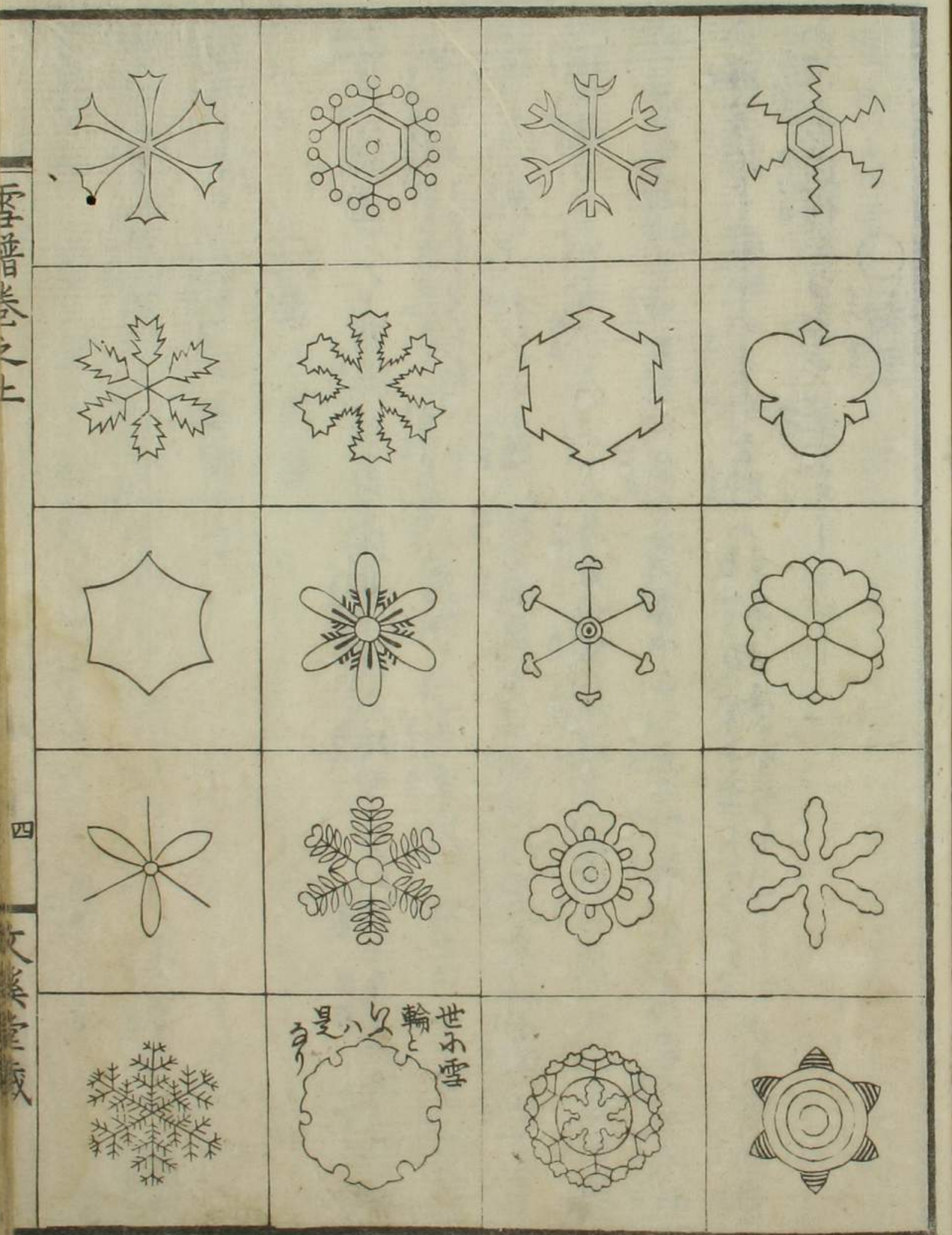
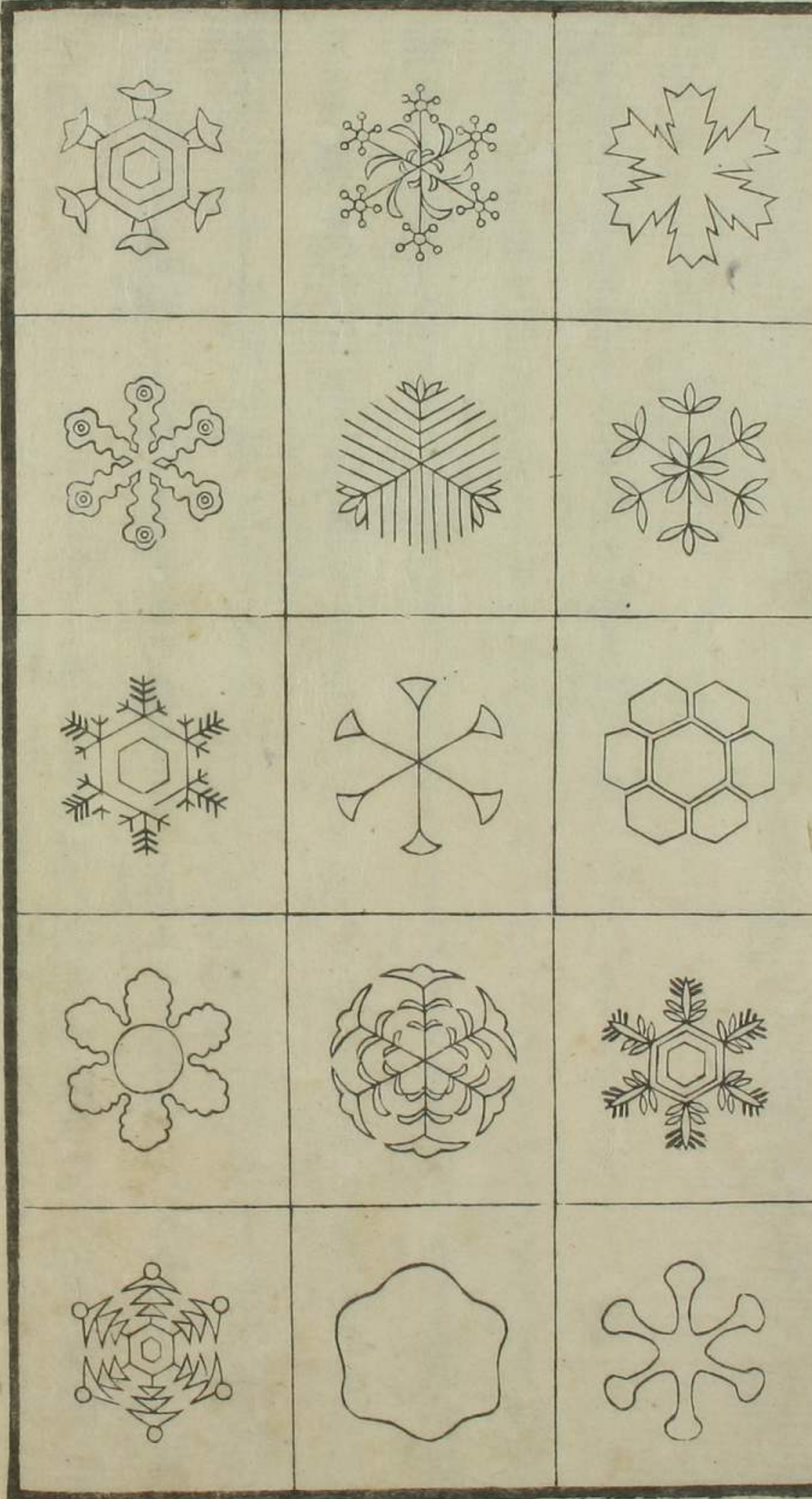
○雪意

我國の雪意ハ暖國ハ均ハ九月の半より霜を置テ寒氣次第ハ  
 烈ク九月の末ハ至ハ殺風肌を侵テ冬枯の諸木葉を落ハ天色雲トハ日の光  
 看さるる連日は雪の意ハ天氣朦朧ハ數日ハ遠近の高山ハ白を点ド  
 て雪を觀せハ里言ハ嶽廻ハ又海ある所ハ海鳴り山ハ山ハ



○驗微鏡を以て雪状を審み視る圖  
 此圖ハ雪花圖說の高撰中ハ在り時五五品の  
 内ハ勝寫ト是別江之の雪ノ方里をへる言  
 紅毛の雪トて是ハ洞ノ物ハ事高撰中ハ  
 詳ト以て天の无量なるを知る

天機凡々百花中六出奇詭別示工  
 洋雪言篇第拾冊茲抽珍図辱  
 高凡 題雪花圖 收之 四



世小雲  
 輪  
 是ハ

遠雷の如くあまれ里言ふ胸鳴りといふことを聞き雪の遠くさるをある年の寒暖ふつとて時日さるるほどだけまうりとうり秋の彼岸前後ふあり毎年かのおと

○雪の用意

前ふりつごご雪降んとする分量り雪小損せざる為小屋上小修造を加梁柱肩家の前の屋翼を埋言ふらうり  
其外きて居室小係る所力弱いことを補ふ雪小潰まざる為庭樹大小小随ひ枝の曲死まげて縛束指丸太又ハ竹を添杖とす  
て枝を強うりしむ雪折をいとむ冬草の類ハ荒庭を以覆ひ包む井戸小屋を懸  
厠ハ雪中其物を荷まむる備をる雪中小一点の野菜もるけは家内の人教  
小あふひく雪中の食料を貯ふ  
小種々の造作をるる筆ふそりぐて

○初雪

暖国の人の雪を賞観する前ふりつごご江が雪の降る年もあるが初雪  
いこもく小美賞し雪見の船小哥妓を携雪の茶の湯小賓客を招き青樓ハ雪成  
居統の媒とす酒亭ハ雪を來客の嘉瑞とする雪の為小種々の遊樂をるる杖  
舉ぐて雪を賞するの甚くは銀花のまうりしむ所雪国の人々を見てもを聞て  
羨むる我國の初雪を以てこも小比を樂と苦と雪泣のちびをこく越後国  
ハ北方の陰地るまも一国内陰陽を前後をいんとする天ハ西北ふたつ西  
北を陰と地ハ東南ふたつ東南を陽と守越後の地勢ハ西北大海小對して陽氣  
之東南ハ高山連りて陰氣之由ふ西北の郡村ハ雪浅く東南の諸邑ハ雪深し是陰陽  
の前後をさる小似たり我任魚沼郡ハ東南の陰地ゆて。巻機山。苗場山。八海山。牛が  
嶽。金城山。駒が嶽。免が嶽。浅州山等の高山其餘他国小聞えさる山ハ波濤のごとく  
東南小連り大小の河も縦横をる陰氣充滿して雪深き山間の村落も雪の  
深をさる内とて北ハ寒く南ハわらわると同道理ハ我國初雪を視るる遅と速とハ

其年の氣運寒暖不つて均くはとらざるも初雪ハ九月の末十月の首ハあり  
 我國の雪ハ鷲毛をうき降時ハうるハ粉砕をうき風又て道を助く故ハ一昼夜  
 積所六七尺より一丈ハ至る時もあり往古より今年ハゆるま心此雪此国ハ降る  
 るハさほど暖国の人のごとく初雪を觀て吟詠遊興のありハ夢中もあらず今年も  
 又此雪中ハ在るやかと雪江悲ハ邊郷の寒国ハ生る不幸といふハ雪を觀て樂む  
 人の數花の暖地ハ生る天幸を羨みんや

○雪の堆量

余が隣宿六日町の俳友天吉老人の語ハ妻有庄ハわがハ頃聞ハ千隈川の邊の雅  
 人初雪より天保五年十二月廿五日までの間雪の下る毎ハ用意ある所の雪を尺をりて  
 量りハ雪の高さ十八丈ありハとりのこぞ此語雪国の入る信ハかたもどつ  
 りハ思量ハ十月の初雪より十二月廿五日までハその日數八十日の間ハ五尺ハ雪ハ  
 四丈ハゆるるハ隨て下ハ隨て掃ハ処ハ積でるるハ又地ハわがハ減もするハ

かきをしつて是をわがハ我國の深山幽谷雪の深さよりあはるハ天保五年ハ我國  
 近年の大雪ありハゆゑ右の語誣ハべからず

○雪竿

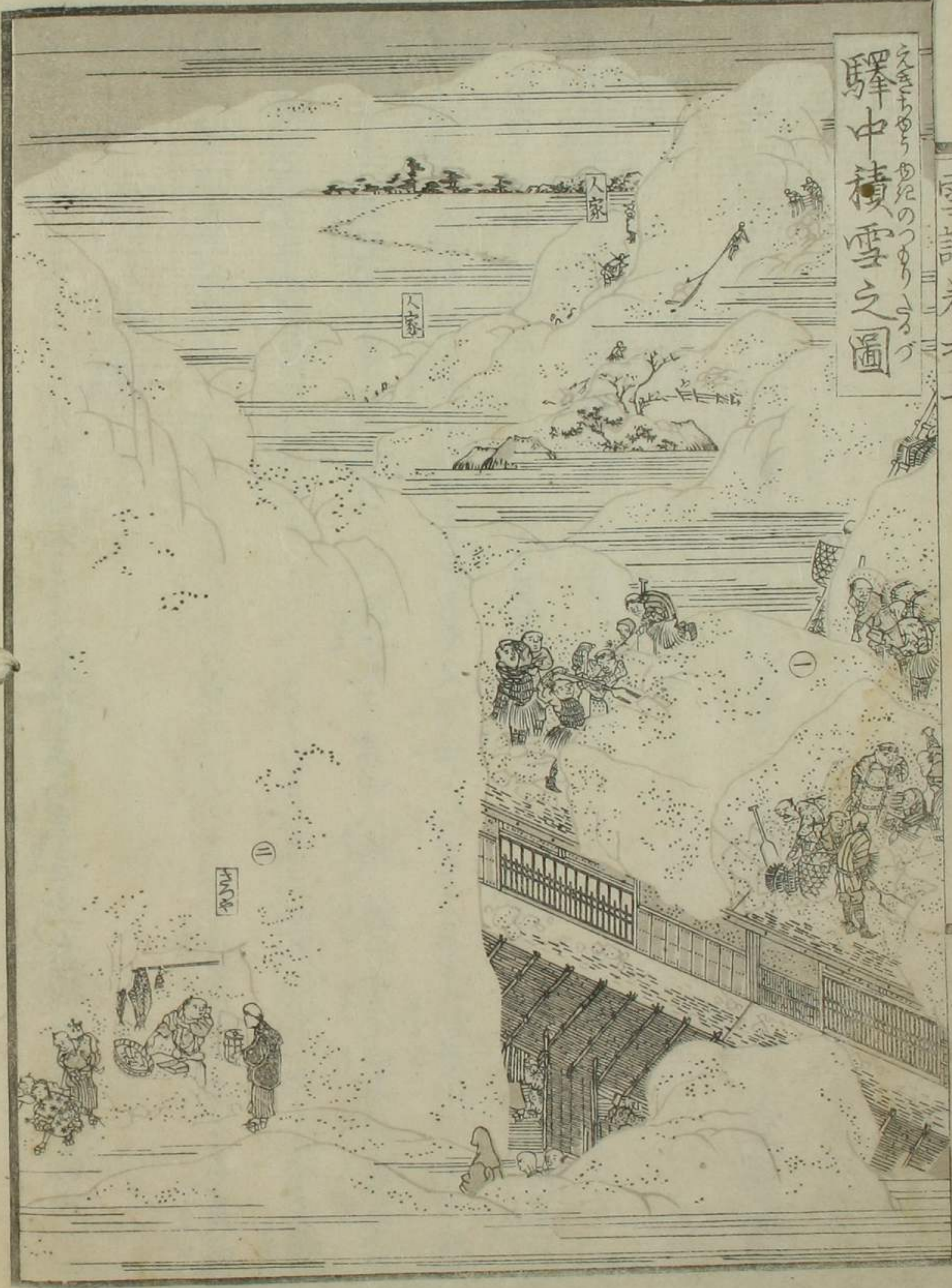
高田御城大手先の廣場ハ木を方ハ削り尺を記ハ七建のハ是を雪竿とハ長一丈ハ  
 雪の深淺ハ公税ハ係るを以てするハ高田の俳友根石子ハりの春翰ハ天保五年雪竿を  
 又とて當地の雪此節一丈ハ餘りハとのハ末より雪竿とハを越後の事とハて俳  
 句ハもええハとど此国ハ於て高田の外ハ无用の雪竿を建るハ昔ハも今ハもハ風  
 雅をりて我國ハ遊ハ入雪中を避て三夏の頃此地を踏ハ越路の雪をあらハ然るハ  
 越路の雪を言ハ葉ハ作意ハなぐるハありハ我國の心ハ笑ハふハ多ハ

○雪を掃ふ

雪を掃ハ落花ををらハ對ハて風雅のハツハ和漢の吟咏ハあハるハ  
 かる大雪ををらハ風雅の状ハあハるハ初雪の積りハるをそのまハあハれば再ハ下る



驛中積雪之圖



理家大雪  
年慣習多  
恨天梅柳  
二月尽去  
原代傳好  
鈴木收之  
題



京水筆

一 人家の雪を掘る事本  
文ありきこと 二 雪をわけて  
洞のてらふは 柳も葉もこぼ  
雪も作り物を賣りて買をさる  
やとの山の中 山の如くあり  
雪あり

ゆゑ負しき旅人八人の道をひらきを待て空く時を移り健足の飛脚とりども  
 雪途を行ハ一日三里小過ぐ楕円足自在なり雪膝を越るも冬冬の雪中一  
 の歎難く春の雪凍て鑄石のごとくなり雪車又雪舟の字を以て重を乗る里人ハ雪  
 車小物をのせおのきものりて雪上を行く舟のごとくも雪中ハ牛馬の足立るゆゑも  
 雪車を用ふ春の雪中重を負しゆるり生馬小勝る雪車の制作別記形大小種あり大なるを御羅雪国の便  
 利第一の用具と云ふも雪凍りたる時小あらし雪舟用ひてゆゑも里人雪舟途と  
 唱ふ

○雪蟄

凡雪九月末より降りて雪中ハ春を迎正二月ハ雪尚深し三四の月小至りて  
 次第小解五月小ゆりて雪全く消て夏道とる年の寒暖小なりて四月小ゆりて春の  
 花も一時小ひくくさるる雪中ハ在る凡ハ八月一年の間雪を看ざる僅小四ヶ  
 月さども全く雪中ハ蟄え半年と云ふを以て家居の造りハさう萬事雪を御

ぐと専と財を費力を及ぼし紙筆小記一農家ハ夏の初より秋の  
 末まで小五穀をも收るゆゑ雪中ハ稻を刈りあり其忙しみの千辛万苦暖国の農業ハ  
 比を百倍と云ふと雪国ハ生る者ハ幼稚より雪中ハ成長もゆゑ寒中の寒を  
 あらざるごとく雪を雪と云ふ暖地の安居を味さるゆゑ女ハさう男も十人ハ  
 七人ハ是と云ふも住バ都とて蟄花の江戸小奉公と云ふ年ありて後雪国の故郷ハ飯  
 る者もさう又十人ありて七人の胡馬北風ハ嘶き越鳥南枝ハ巢ふ故郷の忘るる世  
 界の人情と云ふ雪中ハ廊下紅下雪垂雪垂を下雪吹を窓も又  
 こまを用ふ雪ゆりる時ハ巻て明をさ雪下り盛る時ハ積る雪家を埋て雪と  
 屋上と均く平ふり明のとき処なく昼も暗夜のごとく燈火を照して家の内ハ夜  
 昼をわく漸雪の止る時雪を掘て僅小窓をひき明をひく時ハ光明赫奕する  
 佛の国ハ生るらち此外雪簷りの銀難さるゆゑあまごころけきもあるさす  
 鳥獸ハ雪中食无をありて雪浅き国ハ去るもあまご一定るる雪中ハ簷り居て

朝夕をうももの人となんと

○胎内潜

宿場と唱へ所家の前小庇を長くのぞく架る大小の人家をうかくのごとく雪中ハ  
さうさ平目も往来とまきまふより雪中の街用きま如くうまが人家の雪をさふ積次  
策小重て両側の家の間小雪の堤を築さう如くさふ於て所と小雪の洞をひき死より庇  
小通ふてまを里言小胎内潜との又間夫ともい間夫と金堀の方言を借て用さうと  
御夫の本義ハ妻妾の宿外の家の続ぎ処ハ庇さけま高低をうさかの雪の堤を往来  
奸淫さるをのめ  
と主人の足立まき処まき一糸の道を閑き春ふいり雪堆き所ハ壇層を作りく通  
路の便と形画階のごとく所の着いまを登下まふ脚小慣て一歩もあまらうさう  
他国の旅人さふ怖く移歩かつて落る者ありあま雪中小身を埋む視る人ハ  
こまを笑ひ落さるものこまを怒るか難所を作りて他国の旅客を勞ハしむる事  
求さる取為小あさ此雪を取除とまき小人力と銭財とを費をさる導ハ壇成

作りて途を閑くこま初雪より歳を越さ雪漬まてのち紙敷細小記さ小冊  
みんそ一ぐさゆま小省てあささる事甚多し

○雪中の洪水

大小の川小近き村里初雪の後洪水の災小苦むるあり洪水を此国の俚言小水  
揚とり余一年閑との隣驛の親族油屋が家小止宿せ一時頃ハ十月のそぐり  
ぬく雪八九尺つりりるをうりりりか夜半ふいりて近隣の諸人叫び呼りつり立  
駈ぐま小睡を驚し何んやんと胃もをりて臥さる間をせのけま家の主兩  
て小物を提水あがりこさる裏の掘揚立退めとのひまき持る物を二階運びゆく  
勝手の方立いでまを家内の男女狂気のごとく駈まひりて家財を水小流さると  
手當まてい小取退る水小低小随て潮のごとくかきりり已小席を浸庭小漲る次第  
小積さる雪所とて雪あささるあさ雪光暗夜を照して水の流るありさあさるさ  
いそんごさる余い人小助けさる高所小逃登り遙小驛中を眺提灯炬を燈しつこ

大勢の男ども手く小本鋤をうけ雪を越水を渉て声をあげてくふ末るふまへ  
 水揚せざる所の者どもく小馳あつまりて川筋を圍み水を渡さんとする之闇夜ゆ  
 せぐるふをよど女童の泣叫ぶ声或は遠く或は近く聞もあはさのありさる燃  
 残りたる炬つをたよりふ人も馬も首さけ水に浸り漲るるをわたりて馬を助  
 んとする之帯もせざる女片手小兒を脊負提灯を提て高処へ逃のびる近けさ  
 そとてあはれふる命をつりぐらさるるをも取くはかぬが可笑事  
 可憐なる可怖なる極さる筆も尽くがやうく東雲の傾ふ至り  
 て水も落さうと諸人安堵のかひをうぬ○そもく我郷雪中の洪水大りて  
 初冬と仲春とあり此関との驛ハ左右人家の前道づの流あり末魚野川ハ  
 落る三伏の早中も乾くするに清流水もあふ家毎小此流を以て井水の代り  
 ちも桶ゆても汲は流るるを平日の便利井とよりもさる小勝りちる初雪の  
 後十月のころまふあの一の二條の小流雪の為小降埋らる流水ハ雪の下あり故

小家毎小汲へき程小雪を穿て水用を弁すこの穿る所も一夜の雪小埋らるる  
 あまを再うづり屢あり人家ちる流さかのごころるまふこの二條の流の  
 水源も雪小埋り水用を失ふのころる水あがりの懼あるゆゑ所の人力を併て流  
 のかり口の雪を穿るるりささども人毎小業用小さるる時を失ふ又ハ一夜の大  
 雪小かの水源を塞ぐ時ハ水溢て低所を尋て流る驛中ハ人の往來の為小雪を踏へ  
 して低ゆる流水漲り来り猶も溢て人家小入り水難小逢る前小りるごと  
 幾百人の力を尽して水道をひらぎさるる家財を流し或ハ溺死小かともあり○又  
 仲春の頃の洪水ハ大りて春の彼岸前後之雪しまさ消す山ハさるる田圃も渺々  
 たる曠平の雪面もさ枝川ハ雪小埋り水ハ雪の下を流る大河といふとも冬の初より  
 岸の水まづ氷りて氷の上小雪をつりせつりる雪もあつて氷りて岩のころる岸の  
 氷りたる端次第小雪よりつりりちる兩岸の雪相合して陸地とさるる雪の地と  
 なるさる春を迎て寒気次第小和るぎその年の暖気つりて雪も降止る二月





京水築

十二

八



雲中洪水之圖

同

文





道を以て得べし道をもつて得べし

又上は... 熊の穴を掘りて... 熊の穴の口より... 熊の黒い雪の白く... 天保三年辰の春...

○白熊

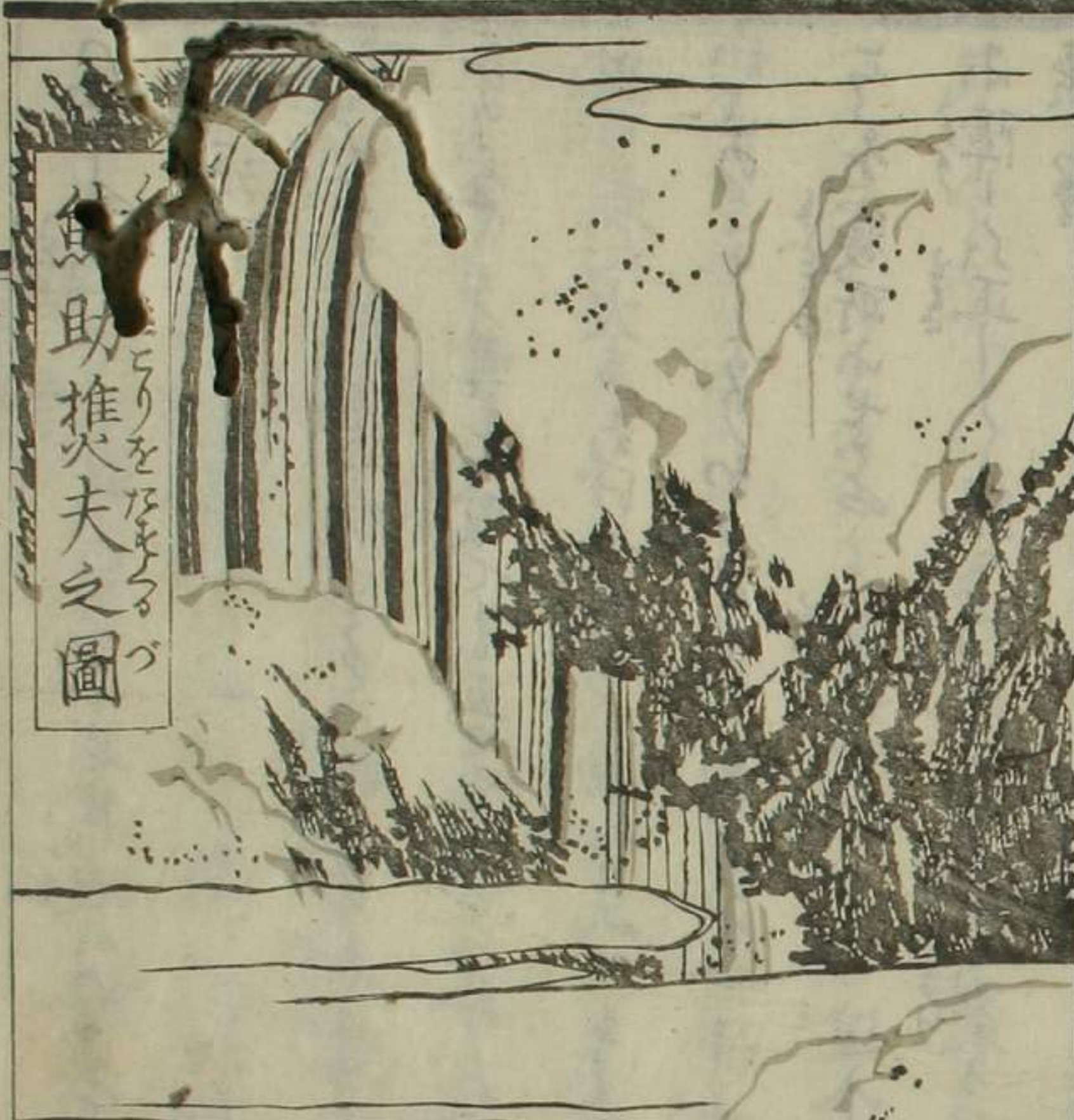
熊の黒い雪の白く... 天保三年辰の春... 時りりふして...

こまを買ひて... 余もつる... 天鷲織のごとく... 皇国の祥象... 山家の人の話... 熊人を助

熊の穴... 熊の穴の口より... 熊の黒い雪の白く... 天保三年辰の春... 時りりふして...

筵を敷く納涼居小主人の酒を好む人老酒着をく小園に余の酒を  
 啜るを以て林を喫く居り小老夫を来り主人を視て拱手て礼をな  
 後園(行んとせ)を主呼とめ老夫を指すのや此由父の壮年時熊小助られ  
 一人の危き命をなせり今年八十二まで健小長生を可賀老人の識面  
 ありぬとの小老夫莞爾とて再本んと余とびとめ熊小助らまると珍  
 説く語りて聞せぬといひ小主人余の前在茶盤をとりてまづ一盃喫て  
 酒を満盃とつきけまば老夫筵の端小坐酒を視て笑をふと続て三盃を  
 喫て古鼓とて大小喜びさる話説やせん我廿歳二月のそめ新をとらんて  
 雪車を引く山入り小村小ちた所小留伏つててあるも足場わじ  
 由多山一重踰るる小薪とまて柴あまあり由多自在小伐より雪車哥  
 うひらり徐く束雪車小積つ縛つけ山刀をさしは低小随て今来り  
 方(乗下り)る小一束の柴雪車より轉ひ落谷を埋る雪の裂隙小をさまり

凍り雪陽氣を得たがゆえ捨て飯も惜まざる所の所ありり柴の枝小  
 裂るり常と手をつけ引上んとするふせりも動小落る勢小撞ひまるとんさる重  
 うとより引上んと匍匐して双手を延て一声うけり上んとあする時足小踏力  
 むれゆまのまをちらるる小己が躰を轉倒雪の裂隙より遙の谷底(墜け)る  
 雪の上を溘落る由多幸小疵うけむまの夢のやうとてやうく小心付  
 上をさるる雪の屏風を建るごとく今も雪顔やせんと下小あつた  
 生る心地はく暗くくせめて小明方小いせんと雪小埋る狭谷間をつま  
 やうく小く空を見り所ありり小谷底の雪中寒烈く手足も龜手  
 一歩もさるるびぐくかくて凍死べと心を励て猶途もあるくと百歩をり行  
 ろりけん滝ある所ありり四方をさる小谷間の途極ゆる甕小落る鼠のごとく  
 せんまへり惘然とて小覺せりいせんといふ思案さ出さるたま  
 是より熊の話今一盃をさるるでて自酌てまきり小喫腰より烟艸俵を



魚助推夫之圖

魚助推夫之圖



男と魚をばねて  
むら一乃長と  
老へつぬ



牧之筆

十七

大英堂藏



圖

宗水筆



大英堂藏







りんごの蠅ハ灰より生じ灰ハ火の燼末とあり蠅ハ火の灰之蠅を殺して形ありの灰中  
 ありては蠅ハ人ノ熱より生じ熱ハ火ノ灰より生じ其由多小蠅も其共小暖るる灰  
 中ハ金中ノ灰ハ肉眼ハおぼろげなる冥塵のごとく其由多小人こまをあらわすたもと銅鏡ノ腐  
 たりぬハ虫を生じ虫ノ生じたる所色を實ぞとてこまを拭く虫こまも其所腐を錯  
 ハ腐ノ始錯の中なる小虫あり肉眼ハおぼろげなる人ありて唐ノ昏れも記せり我越後の雪蛆ハ  
 虫無んやあつても常をあらわす奇と妙とて唐ノ昏れも記せり我越後の雪蛆ハ  
 ちひさなる蚊の如し此虫ハ三種あり一ハ翼ありて飛行すハ二ハ翼なしとも感く蚊行共  
 小足ハあり色ハ蠅ハ似て淡く一ハ其居る所ハ市中原野蚊ハありてちひさきとも  
 人を螫む一ハありてを驗微鏡中  
 視る所をこ小圖して物産家の  
 説を俟つ

○雪蛆の圖



○雪吹

雪吹ハ樹をこ小積りたる雪の風ハ散乱するをいふ其状優美りのゆゑ此のちりるを  
 是ハ比して花雪吹といひ古哥ハあまらえり是東南寸雪の国のるりこ  
 北方丈雪の国我越後の雪深とるの雪吹ハ雪中の暴風雪を卷騰騰之雪中第一  
 の難美とてさあ死る人年々之のつを奉てそ小記寸雪の雪吹のさきつを  
 觀人の為小丈雪の雪吹の愕胎を示す  
 余が住塩澤小遠くふる村の農夫男一人あり篤実小して善親小仕ふ廿二歳の冬  
 二里あまり隔る村より十九歳の娘をむり小容姿憎らば生質柔従わて糸織  
 の伎ハ伶俐なるハ舅姑も可愛り夫婦の中も睦く家内可説春をむり其年  
 九月の末ハ安産して去りも男子ありは掌中明珠を得る心地ゆく家内  
 産婦も健小肥立乳汁も一子小餘るはどるも小兒も肥太り可賀名を  
 つけり十歳を壽けり此一家の若きと篤実なるハ耕織を勤行小農夫とて

も貧乏の善男をもち良娘をむく好孫をまうけりとして二村の人々常々羨望なり  
 かゝる時家小天災を下り如何なるかして産後日を歴てのち連日の雪  
 降止天氣穏なる日娘夫小むひ今日親里へ行んとおもひいれやせんといふ男  
 旁小ありてそへ上りて男も行て実母も孫をよせよとせよとせ夫婦も自  
 慢せよといふ娘いらち多きつと姑小かくといふ姑の俄小土産もど取とる間小娘  
 髪をゆひるどして暗の衣類を着し綿入の木綿帽子も寒国の習として見小く  
 うづい見を懐小いざ記入んとせよ小姑身よりよく乳を吞せといふたは途小  
 て小神祇のさゆくうんと一言の詞小も孫を愛も情もあつとる夫ハ蓑笠三  
 搦脚衣をんを穿晴天中も蓑を着し土産物を輕荷小擔ひ兩親小暇ををり  
 夫婦袂をつつ喜躍して立出たり正是親子が一世の別後の悲難とらるり  
 けり○さるやと小夫ハ先小妻ハ後小あさひやくをかつま小い今日頃目の  
 目扣よりこそかひひとち今日夫婦孫をつとる来りて親とらハあ

と玉ふまゝ孫の顔を見玉ひささぞりよるをびあらんささば小父翁ハいり  
 ぢや来りてと母人ハいさ赤子を見ぬいさるゆゑとささの喜悅あらん逢  
 るる一痛てもとらん部も痛ぬ不可也二人とまりあつ兩親業ぬらん日さハ  
 飯下りあどをるの間の啼小乳房々ませつうちつと道をしを死美佐嶋と  
 い原中小到一時天色倏急小濃り黒雲空小覆ひけさ是雪中夫空を見そ  
 大小驚怖と雪吹るんいさせんと跟踪うち暴風雪を吹散る巨濤の岩を越  
 るりごとく飈雪を卷騰て白竜峯小登りて朗々ありも掌をうむごとく天  
 怒地狂寒風ハ肌を貫の鎗凍雪ハ身を射の箭之夫ハ蓑笠を吹とる妻ハ帽子を  
 吹ちて髪も吹とる吐嗟といふ間小眼小襟袖ハささ之裾も雪を吹いと全  
 身凍呼吸迫り半身ハ己小雪小埋りらささ命のきりあさ夫婦声をあげ  
 と哭叫ぶも往來の人もろく人家も遠けさ助る人もなく手足凍て  
 枯木のごとく暴風小吹僵と夫婦頭を並て雪中小倒と死けり此雪吹其日の

暮小 次日ハ晴天有りけむ近村の者五人此所を通りかりし小の死骸ハ雪吹  
 小埋の者もえさきも赤子の啼声を雪の中ふきけむ人々大不怪をきて  
 迷んとするも在り剛気の者雪を掘りて小の髪を毛雪中小頭より扱ハ  
 昨日の雪吹倒さるん里言小とて皆あつまりて雪を掘死骸を見る小夫婦手を引  
 あひて死居り見ハ母の懐小あり母の袖見の頭を覆ひて見ハ身小雪を  
 觸る由多小凍死せ兩親の死骸の中より又声をあげてさきなり雪中の死  
 骸も生るごとく見知る者ありて夫婦あることをあり我見をいりて  
 袖をかひ夫婦手ををさるさびて死す心のうちかひやきてさき若者の  
 も泪をかとり見ハ懐小の死骸ハ衰小つて夫の家小荷ひおたりりの兩親ハ  
 夫婦娘の家小一宿とありかひをりし小死骸をえて一言の詞もく二人ハ死  
 骸小とりつ死顔小わをかあて大声をあげて哭るハ死るも憐のありさぬ一人  
 の男懐より児をいりて姑小とてけむ悲と喜と兩行の涙をかとりける

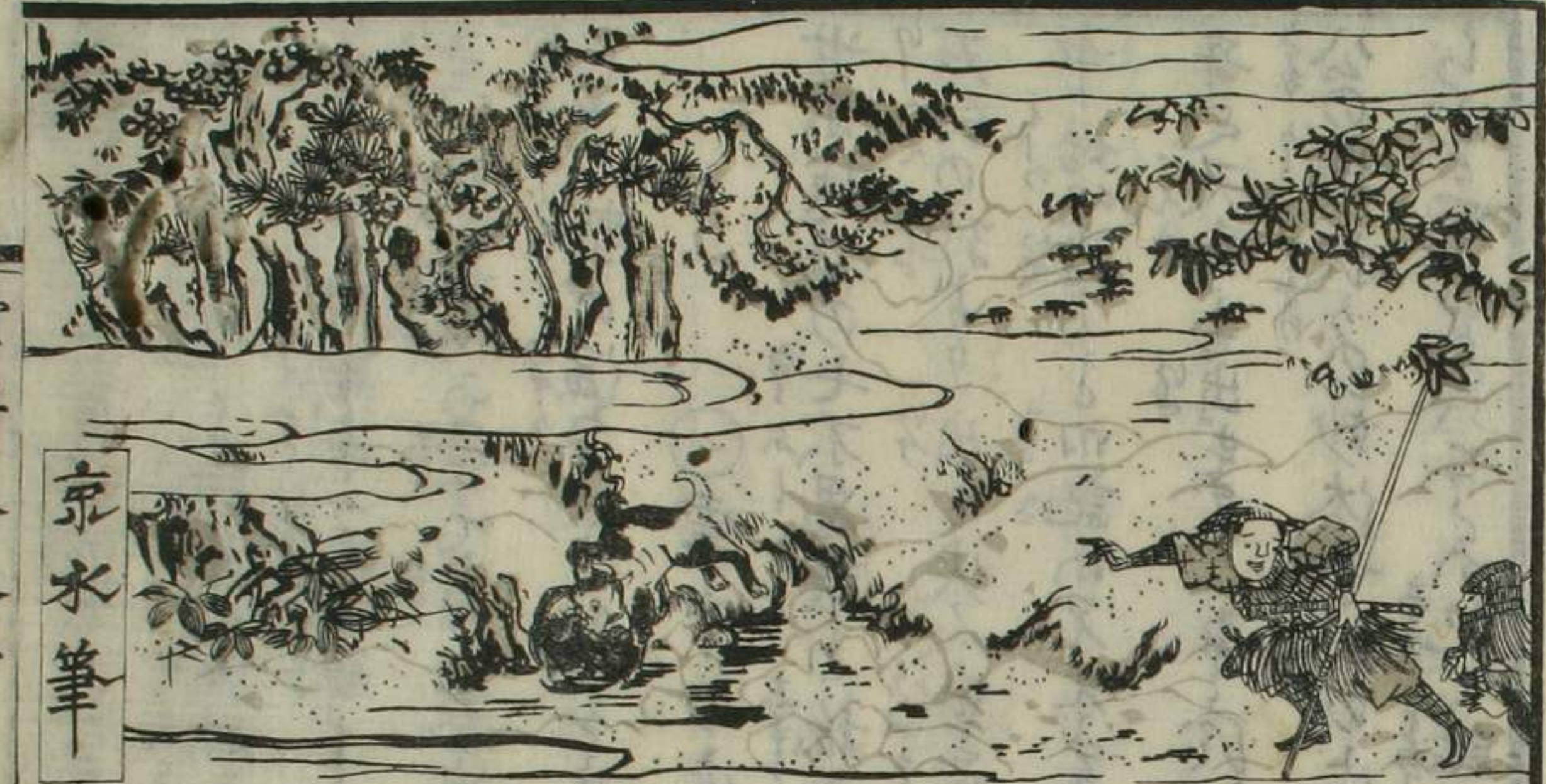
とど

雪吹の人を殺さるり大方右小類を暖地の人花の散小比く美賞する雪吹と  
 其異こと潮干小遊びく樂と供薄小隔て苦の如く雪国の難美暖地の人  
 かひをりて連日の晴天も一時小変りて雪吹とるるハ雪中の常ニ其力樹を  
 扱屋を折人家こまが為小苦むり扱拳ぐり雪吹小逢る時ハ雪を掘身を  
 其内小埋とバ雪暫時つりの雪中ハいつて温まる気味あり且氣息を漏り  
 死をすぬぐるもあり雪中を歩る人陰囊を綿ゆつて小をををせされ  
 ハ陰囊中凍て精気冬冬又凍死するを湯火をゆつて温まバ助るりあきと  
 も武火熱湯を用ふる命とまらりるのち春暖小いも腫病とるり  
 良医も治りて凍死するハ塩を敷て布小包ちかく膝をあてて火  
 凍るも強き湯火をあてむる陽氣のさば灼傷のごとく腫つ小腐

雪中捕熊圖



農人夫婦逢雪吹圖



京水筆



て指をいとも百薬功ありて是れ我が見る所を記し人示す人の凍死するも  
 手足の凍手を陰毒の血脉を塞ぐの候湯火の熱を以て温む人指の氣  
 血をたぎけ陰毒一旦小解るといども全く去る陰ハ陽ハ勝ざるを以て陽氣  
 至ハ陰毒肉小暈て腐之寒中兩雪小歩行て冷する人急小湯火を用ふるに  
 己ハ人熱の温るるもをまうて用ふる長生の一術あり

雪中の火

世ハ越後の七不思議と称する其一ハ蒲原郡妙法寺村の農家炉中の隅  
 石臼の孔より出る火人皆奇とて口碑ふつて諸書ハ散見也此火寛文年  
 中始て出ると日記ハ元々三百余年の今ハ絶るゆり奇中の  
 奇ハ天舟を出さる一ハ穴なる國の奥沼郡ハ又一ハの奇火を出せり天  
 公の機杖の妙法寺村の火とあると彼ハ人の知る所是ハ他國の人の志  
 らざる所とせばて小記テ話柄とす

越後の国魚沼郡五日町との驛ハ近き西の方ハ低き山あり山の裾ハ小溝在  
 天明年中二月の頃とのやとハ童どもあつてさあぐの戲をなして遊倦  
 木の枝をあらめ火を焚てあつたりをりハ其所よりとてとて別ハ火  
 燄と燃あがりけは見曹大ハとて比喩ハ四方ハ逃散けりその中ハ一人の童  
 家ハより事の仔細を親ハ語る小此親心ある者あてその所ハいなり火の形  
 状をえさるし消さる雪中ハ手を入るべきやの孔をさし孔より三四寸の  
 上ハ火燃る熟覺ありてとて正しく妙法寺村の火のなるべしと火口ハ石  
 を入してとて消一家ハよりて人ハ語を雪さえてのち再その所ハいなりて  
 る小火のゆえさるるの小溝の岸ハ火燄をのて燄燭ハ火を点下試ハ池中ハ投  
 りしハ池中ハ火を出せし庭燎のごとハ水上ハ火燃るハ妙法寺村の火よ  
 りも奇とて驛中の人と来りてとてを視るそのち錢ハ才人ハの池のやと  
 りハ温屋をつくり算を以て水をとるごとくハ地中の火を引き湯槽の電



三國嶺雪類の上往來の圖



玉屑團成三國峯  
寒光透骨難移節  
何人寵雪双花月  
棧怪凌雲踏白龍  
京山人題

雪の  
うを  
あき  
た

京水峯

ともあまがうく叶つてやまて雪類ハ雪吹小双て雪国の難美と云高山の雪ハ里  
 よりも深く凍るも又里より甚一我東南の山々里小ちるも雪一丈四五尺な  
 る浅一と云此雪よりて岩のごころなるもの二月のころ小い雪ハ陽気地中を  
 蒸く解んと云時地氣と天氣との為小破て響をうけ一尺破て片々破る其ひき  
 大木を折ぐごとく一色雪類ハと云るの崩之山の地勢と日の照をよふよりてな  
 だも処と云る雪の凍るの処ありの雪のふり二月のころ里人ハその時をあり処を  
 あり崩を知る由多小なる雪のよめ小撃死するもの掃くまらざるも天の氣候不意  
 中一一定なる雪類の下小身を粉小碎もあり雪類の形勢いんとなるは  
 ろ雪んと云る雪の凍るの大小十間以上小なるも九尺五尺小あまる大小數百  
 千悉く方をりて削りてさるごとく下小舟たありの幾千丈の山の  
 上より一度小崩顔その響百千の雷をう大木を折大石を倒此時ハか  
 らる暴風力をそく粉小碎さ沙礫のごとく雪を飛せ白日も暗夜の如く

その慄一なる筆帝小尺一が一此雪類小命を捨ち人命を捨一人我が  
 見聞一を次の巻小記一暖國の人の話柄と云

或人問曰雪の形六出なる前小弁ありて詳之雪類ハ雪の塊るん碎る  
 形雪の六出なる本形をとりて方形いん答て曰地氣天小實格一  
 て雪と云るゆ多天の四と地の方とを併合六出をり六出ハ四形の  
 裏之雪天陽を離て降下り地小飯ハ天陽の四さ象うせて地陰の方  
 本形小象るゆ多小雪類ハ千も万も圭角このる雪解るゆ多角  
 四くあること陽火の目小てさるゆ多天の四小する陰中小陽を包と  
 陽中小陰を抱ハ天地定理中の定格と老子經第四十二章小曰萬物負  
 陰而抱陽沖氣以為和とり此理を以てする時ハ内美さぬりつもか  
 内美さぬて陰中小陽を抱とて天理小叶をりハ夫小代りて理屈  
 をしつて家内治とて理屈小過此鳥且をつとむるも



又家内の陰陽前後して天理不違ふも各家の亡るものと萬物の天  
 理証<sup>まじふ</sup>べからざるやか<sup>か</sup>の<sup>ご</sup>と<sup>と</sup>の<sup>ひ</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>同<sup>おな</sup>容<sup>ゆる</sup>唯<sup>ただ</sup>と<sup>と</sup>本<sup>もと</sup>の<sup>ぬ</sup>雪<sup>ゆき</sup>類<sup>るい</sup>  
 悉<sup>ことごと</sup>く<sup>く</sup>方<sup>かた</sup>形<sup>がた</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>も<sup>も</sup>十<sup>じゅう</sup>六<sup>ろく</sup>と<sup>と</sup>七<sup>しち</sup>八<sup>はち</sup>方<sup>かた</sup>形<sup>がた</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>故<sup>ゆゑ</sup>  
 小<sup>せう</sup>此<sup>こ</sup>説<sup>せつ</sup>を<sup>を</sup>下<sup>くだ</sup>せ<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>雪<sup>ゆき</sup>類<sup>るい</sup>の<sup>の</sup>國<sup>くに</sup>多<sup>おほ</sup>く<sup>く</sup>方<sup>かた</sup>形<sup>がた</sup>ふ<sup>ふ</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>其<sup>その</sup>七<sup>しち</sup>八<sup>はち</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>換<sup>か</sup>  
 様<sup>よう</sup>を<sup>を</sup>為<sup>な</sup>す<sup>す</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>

北越雪譜初編卷之上終

